津山市埋蔵文化財発掘調査報告第69集

押入兼田遺跡

南上空からみた遺跡全景

2000

津山市教育委員会

押入兼田遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第69集

2000

津山市教育委員会

押入兼田遺跡遠景（南から）

押入兼田遺跡遠景（東から）

押入兼田遺跡全景

押入兼田 1 号墳

序

押入兼田遺跡は、津山中央病院のヘリポート建設に伴い新発見された遺跡です。緊急に発掘調査を実施することとなりましたが、関係者の理解と協力のもと円滑に作業を行うことができました。

限られた範囲の調査とはいえ、縄文時代から古墳時代に至る複合遺跡で、豊富な内容を持つことがわかりました。縄文時代晩期中葉の土器、弥生時代後期の特異な土器の出土、5世紀前半期の古墳群の存在など、それぞれの時代において津山市内では初めてもたらされた知見もあり、津山市東部地域の歴史を知るうえで重要な手がかりを得ることができました。

本書は、この発掘調査の記録をまとめたものです。小冊子ですが、地域の研究の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財の保護についてご理解とご協力をいただいた財団法人津山慈風会、戸田建設株式会社広島支店、そして酷暑の中発掘作業遂行に協力いただいた社団法人津山市シルバー人材センターを始めとする関係者各位に敬意を表します。

平成12年3月31日

津山市教育委員会
教育長　松　尾　康　義

本文目次

Ⅰ　位置と周辺遺跡
1．遺跡の位置 …… 1
2．周辺の遺跡 …… 1

Ⅱ　調査経過
1．調査に至る経過 …… 3
2．試掘調査 …… 3
3．発掘調査 …… 3

Ⅲ　調査の記録
1．縄文時代 …… 5
A．土　壙 …… 5
2．弥生時代 …… 8
A．1号住居跡 …… 8
B．2号住居跡 …… 9
3．古墳時代 …… 12
A．1号墳 …… 12
B．2号墳 …… 16
C．3号墳 …… 17
D．4号墳 …… 19
E．5号墳 …… 20
F．6号墳 …… 21
4．その他の遺構と遺物 …… 21
A．段状遺構 …… 21
B．遺　物 …… 21

Ⅳ　考　察
1．縄文土器 …… 23
2．弥生時代 …… 23
3．古墳時代 …… 24

挿図表目次

第１図　押入兼田遺跡と周辺の主要遺跡‥２
第２図　調査区域図 …… ２
第３図　押入兼田遺跡全体図 …… ４－５
第４図　土壙平面断面図 …… ５
第５図　土壙出土縄文土器１ …… ６
第６図　土壙出土縄文土器２ …… ７
第７図　土壙出土石器 …… ７
第８図　磨製石斧 …… ８
第９図　１号住居跡 …… ９
第10図　１号住居跡出土遺物 …… ９
第11図　２号住居跡 …… 10
第12図　２号住居跡出土遺物 …… 10
第13図　２号住居跡出土鉢拓影 …… 11
第14図　押入兼田１号墳 …… 12
第15図　１号墳埋葬施設 …… 13
第16図　１号墳出土遺物 …… 14
第17図　２号墳 …… 16
第18図　２号墳箱式石棺痕跡 …… 16
第19図　３号墳 …… 17
第20図　３号墳埋葬施設 …… 18
第21図　３号墳出土遺物 …… 18
第22図　４号墳 …… 19
第23図　４号墳埋葬施設 …… 19
第24図　５号墳 …… 20
第25図　６号墳 …… 20
第26図　６号墳土壙 …… 21
第27図　段状遺構 …… 21
第28図　弥生土器・土師器 …… 21
第１表　１号墳第１主体出土玉製品観察表 15
第２表　押入兼田古墳群一覧表 …… 24

写真図版目次

巻頭図版１　押入兼田遺跡遠景（南から）
　　押入兼田遺跡遠景（東から）
巻頭図版２　押入兼田遺跡全景
　　押入兼田１号墳
図　版１　押入兼田遺跡遠景
図　版２　押入兼田遺跡全景
　　確認調査風景
図　版３　縄文土壙
図　版４　１号住居跡
図　版５　２号住居跡
図　版６　２号住居跡
　　段状遺構
図　版７　１号墳
図　版８　１号墳埋葬施設
図　版９　１号墳埋葬施設
　　遺物出土状況
図　版10　２号墳
　　２号墳埋葬施設
図　版11　３号墳
　　３号墳埋葬施設
図　版12　３号墳埋葬施設・土器出土状況
　　４号墳
図　版13　４号墳・５号墳
図　版14　６号墳
　　発掘調査風景
図　版15　出土遺物１
図　版16　出土遺物２
図　版17　出土遺物３

例　言

1　本書は押入兼田遺跡発掘調査の報告書である。

2　調査は平成11年度に津山市教育委員会が実施した。

3　調査および報告書作成に要する経費は財団法人津山慈風会が負担した。

4　調査は津山市教育委員会が担当し、津山弥生の里文化財センター中山俊紀、安川豊史、行田裕美小郷利幸、平岡正宏、川村雪絵の全員が発掘調査にあたった。

5　調査に使用した座標は第Ⅰ直角平面座標系で、第3図のX・Y座標数値の単位はmである。本書で使用する方位は座標北を示し、高さは海抜高である。

6　本書の執筆は調査員全員が担当し、安川が編集した。執筆分担は以下のとおりである。
Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ-3-D・4-B（安川）、Ⅲ-1・Ⅵ-1（行田）、Ⅲ-2・Ⅵ-2（中山）、Ⅲ-3-A・Ⅵ-3（小郷）、Ⅲ-3-C（平岡）、Ⅲ-3-B・E・F・4-A（川村）。

7　出土遺物および図面等は津山市教育委員会津山弥生の里文化財センターに保管している。

Ⅰ　位置と周辺遺跡

1．遺跡の位置

押入兼田（おしいれ・かねだ）遺跡は、津山市街地から約2−東の丘陵上に位置する。 行政区画は岡山県津山市押入字兼田1129-1番地に属する。

丘陵は、津山市内を貫流する吉井川の一支流である加茂川と、それに流れ込む蟹子川に向かって張り出した、平地との比高差約30ｍの独立丘陵である。丘陵最高所の標高は125.5ｍで付近では最も標高があり、西側を除く三方の視界は良好である。特に北東から南方にかけては、高野地区から河辺地区にいたる、加茂川が形成した沖積地を広く望むことができる。遺跡が位置するのは、この丘陵の頂部である。調査前は山林であったが、以前には畑として利用されたこともあったらしい。この丘陵の西側は次第に下った鞍部地形から再び丘陵となり、そこに橋本塚古墳が位置する。

遺跡の南側には現在、財団法人津山慈風会の津山中央病院が位置する。中央病院に先行する国立療養所津山病院の建設に伴う過去の工事で地形は大きく変更されていて、旧状をうかがうことはできないが、北西からいくつかの丘陵が派生していたとみられる。

2．周辺の遺跡

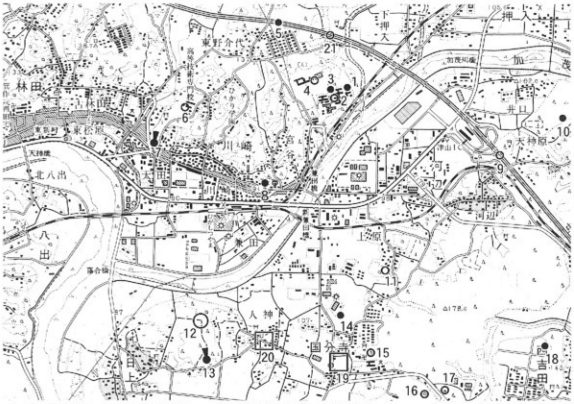
押入兼田遺跡西側には橋本塚古墳が位置する。橋本塚古墳は、高さ5ｍ、直径約28ｍの円墳で、墳丘中央から南東に向かう盗掘坑が存在する。盗掘坑壁面には石材が観察されず、木棺直葬あるいは粘土槨等石材を用いない埋葬方法であったようだ。この西側には直径9ｍ、高さ1.5ｍの円墳と思われる小墳1基が存在する。この古墳も盗掘を受けているが、埋葬主体は横穴式石室以外のものであると思われる。いずれも未調査のため所属時期などの詳細は不明である。

遺跡南西の病院地内には、かつて20数基からなる能満寺古墳群が存在した。応急に調査された E号墳の小横穴式石室内には陶棺2体があり、金環、管玉、直刀片、土師器および須恵器が出土している。7世紀代の古墳群であったと思われる。

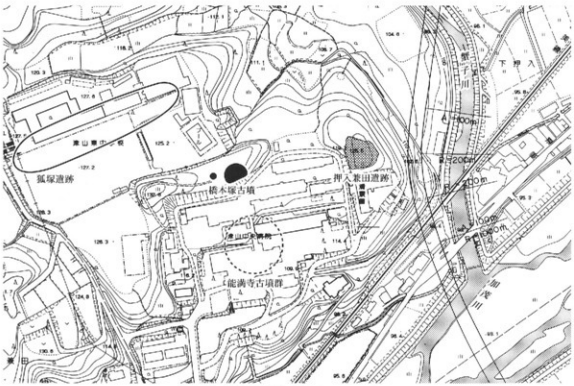
谷を隔てた北側丘陵には古墳時代後期の集落跡である狐塚遺跡が存在する。津山市立東中学校建設に伴う発掘調査で、掘立柱建物や竪穴式住居、鍛冶炉などが検出され、鉄鉱石、製錬滓、小鉄塊、鉄素材などの製鉄関連遺物が出土した。所属時期からみると能満寺古墳群の被葬者達の居住地であった可能性がある。遺跡主要部は校庭に保存されている。

加茂川以北の丘陵部には、前方後円墳の正仙塚古墳(墳長55ｍ)のほか、押入西1号墳、押入飯綱神社古墳群、川崎六ツ塚古墳群、玉琳大塚古墳、兼田丸山古墳などが存在する。押入飯綱神社古墳群には葺石をもつ方墳1基が含まれる。これらは概ね5世紀代から6世紀前半にかけてのものである。

加茂川南岸の河辺地区には、口上畝山古墳群、長畝山古墳群、長畝山北古墳群などいわゆる古式群集墳が存在する。5世紀末ないし6世紀初頭の築造で、円墳からなる。井口車塚古墳は同時期の帆立貝式古墳である。西吉田北1号墳はこれらに先行する方墳である。国分寺飯塚古墳は直径約35ｍの円墳で美作地域では大形墳のひとつである。その後、本地区では奈良時代になると美作国分寺および同尼寺が建立される。



第1図　押入兼田遺跡と周辺の主要遺跡（国土地理院25,000分の1地形図「津山東部」）



第2図　調査区域図（縮尺1：4,000）

Ⅱ　調査経過

1．調査に至る経過

押入兼田遺跡が存在する一帯は、政府による結核予防対策の一環として昭和26年10月1日に国立津山療養所として発足した。その際に能満寺古墳群が建設工事の対象となり、E号墳について応急の発掘調査が実施された。その後、療養所は慢性疾患の治療や救急医療等に対する地域の要望を受け、昭和55年に国立療養所津山病院と名称変更して地域医療の中核としての役割を長らく担ってきたが、全国的な国立療養所統廃合の動きを受けることとなった。

これに対し、津山市を含む県北31市町村は関係諸団体とともに県北地域医療推進対策協議会を結成し、緊急救命センターおよび地域災害医療センター等を併設した岡山県北地域の健康、福祉、医療の拠点づくりをめざした。その結果、財団法人津山慈風会が国から経営移譲を受けて、既存施設の他に医療施設を新設して津山中央病院として新たにスタートすることとなった。

平成11年4月に、中央病院建設工事に伴う文化財保存協議があった。現地確認の際、駐車場拡張予定地に橋本塚古墳の一部が位置することが判明し、協議の結果、計画変更して古墳を現状保存することとなった。その際、ヘリポート建設予定地についても現地を踏査した。山林となっていて、墳丘などの存在は認められなかったものの、平地に向かって突出した良好な丘陵上に位置し、何らかの遺跡が存在する可能性が高いと判断されたので、樹木の伐採をまって確認調査を実施することとした。

2．試掘調査

平成11年8月10日に試掘調査を実施した。バックホーを用いて幅2ｍ、長さ25～30ｍの南北方向の試掘溝を東西に2本設定して調査した。

東トレンチの南半部で直径10数ｍの低平な高まりを検出した。この南北両端には周溝とみられる溝状落ち込みが存在することと、中央部に盛土層が残存することから、この高まりは古墳の基底部であると判断した。後世の削望等によって墳丘上部が削平を受けたもので、埋葬主体は失われている可能性が高いと思われた。さらに古墳の北側に別の溝を検出した。

西トレンチ南端部で、不整形の地山の落ち込みを検出した。土器片が出土したが、小片のため時期は不明である。トレンチの北部で竪穴式住居と思われる円形の落ち込み1箇所と不整な落ち込みを検出した。前者からは木炭片が出土した。

以上のトレンチの所見から、本地点は古墳と弥生時代ないしは古墳時代の集落遺跡からなる複合遺跡と判断された。この段階では予定地内に存在する古墳の総数は明らかではなかった。

3．発掘調査

試掘調査の結果を受けて、遺跡の取り扱いについて協議を行い、工事により削平を受ける約850㎡の範囲について発掘調査を実施することとした。発掘調査と報告書作成に要する経費は、原因者である財団法人津山慈風会（理事長 竹久亭）が負担することとし、工期の関係から直ちに発掘調査に着手することとなった。8月19日から21日まで重機による表土剥ぎを実施。20日からは表土剥ぎと併行して人力

による遺構の掘り下げを開始した。

表土を除去した結果、遺構は調査区のほぼ全域に存在することが明らかとなった。試掘調査時に東トレンチで検出した古墳は、方墳であり、その周囲に５基の古墳が隣接することが判明し、検出順に１号墳から６号墳までの名称をつけた。古墳の内訳は、方墳４基、円墳２基である。いずれも墳丘上部が削平を受けていて、盛土はほとんど遺存しない。古墳の他には弥生時代の住居跡２棟、時期不明の段状遺構１基を検出した。調査区北方の１号住居に接して縄文時代の土壙１基が存在する。

９月１日まで遺構の掘り下げを実施し、９月３日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。遺構実測ののち、９月８日に炎天続きの現地作業を完了した。

発掘調査および整理作業は下記の体制で実施した。

津山市教育委員会　教育長　松尾康義
教育次長　菊島俊明
文化課長　森元弘之
文化財センター所長　中山俊紀（以下、発掘および整理）
次長　安川豊史
主査　行田裕美
主任　小郷利幸
主事　平岡正宏、川村雪絵
嘱託員　野上恭子、岩本えり子、家元弘子
臨時職員　仁木智子、上原恵美、岩本美紀

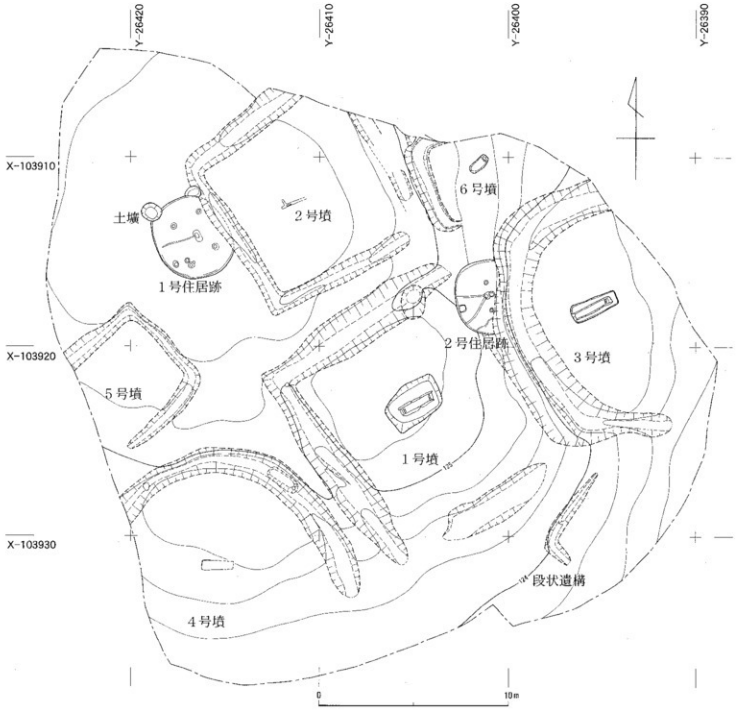
発掘作業は津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。

（調査作業員）　稲垣光男、稲垣裕史、梶尾嘉明、加藤文平、木沢敏男、谷口末男、野口定男
藤沢淳一郎、藤木靖史、森二三夫

（学生アルバイト）　西村雄志

発掘調査および報告書作成の過程において、つぎの機関および方々にお世話になった。記して感謝申しあげます。

財団法人津山慈風会、戸田建設株式会社広島支店、浮田芳典、居森英行、亀田修一、白石　純
高橋　護、田中清美、松本和男



第3図 押入兼田遺跡全体図（縮小1：200）

Ⅲ　調査の記録

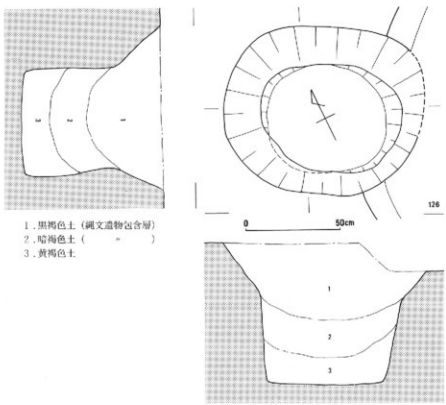
1．縄文時代

A．土　壙

土　壙（第４図）　丘陵の頂部に位置する１号住居と重複して位置する。

１号住居跡は４本柱の楕円形プランを呈す住居であるが、この住居の北西部に４分の１程が重複する。土壙の検出面と住居床面とのレベル差は約15㎝であり、この部分が竪穴住居掘削の際に失われている。

土壙の平面プランは楕円形で、検出面では長径１ｍ強、短径90㎝、底面では長径60㎝強、短径55㎝である。検出面から約30㎝下位に壁の傾斜変換点があり、これより上位は緩やかで、下位は垂直に近く掘り込まれている。短径の断面図にみられるように、部分的にオーバーハングしている箇所も見られる。検出面からの深さは75㎝である。



第４図　土壙平面・断面図（縮尺１：20）

埋土は大きく３層に分かれ、下から黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土の順に堆積している。上層と中層の黒褐色土と暗褐色土が縄文の遺物包含層で縄文土器、サヌカイト製の石器、剥片、砕片などが出土したが、大半は上層の黒褐色土に包含されていた。

通常、この種の土壙には底面に１ないし２個のピットがあることが多く、「陥し穴」と考えられている。しかし、本土壙にはピットが見られない。また、サヌカイト製の剥片、砕片が多く含まれていることから、別の機能を想定した方が良さそうであるが、現段階では明瞭な回答を持ち合わせていない。

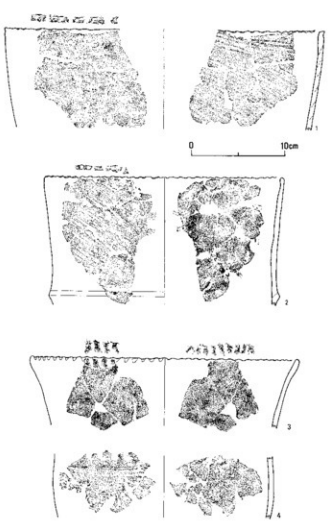
縄文土器（第５・６図）　縄文土器は個体数にして10数個体程あるが、いずれも破片であり正確な数は把握しがたい。これらのうち、器形及び部位がわかるものを図示した。

１は口径36㎝の深鉢である。口縁部下位11㎝が残存する破片である。外面は風化が進んでいるが、ナデ仕上げのようである。粘土帯の接合による凹凸が顕著である。色調は外面が淡黄褐色である。内面は黒灰色で、幅４㎜前後の条痕による調整である。口縁端面は平坦でキザミが施されている。

2は口径26cm前後の深鉢で、口縁端部から胴部にかけて14cmが残る破片である。口縁端面にはわずかに平坦面がみられ、その上にキザミが施されている。その結果、内外面とも細かな波状口縁になっている。調整は外面が条痕、内面はナデである。色調は内外面とも黒灰色であるが、外面の一部に暗黄褐色を呈する箇所がある。外面の下位にススの付着が認められる。
精製土器である。

3・4は同一個体と考えられる深鉢である。やや丸みを帯びて張った胴部から頸部にかけてくびれ、口縁部にかけて緩やかに外方に開く器形である。口径は30cmである。口縁端部の外面からキザミが施され、波状口縁となっている。胴部には爪形状の刺突文がめぐり、その下位に横方向の条痕がみられる。胴部外面にはススの付着がある。

調整は内面及び口縁部外面がナデである。色調は外面が淡茶褐色、内面が黒灰褐色である。



第5図　上壌出土縄文土器1（縮尺1：4）

5・6はほぼ同じ器形で、丸い胴部から口縁端部にかけて外方に緩やかに開く。深さで見る限り深鉢と浅鉢の中間的な器形であるが、ここでは深鉢に分類しておく。

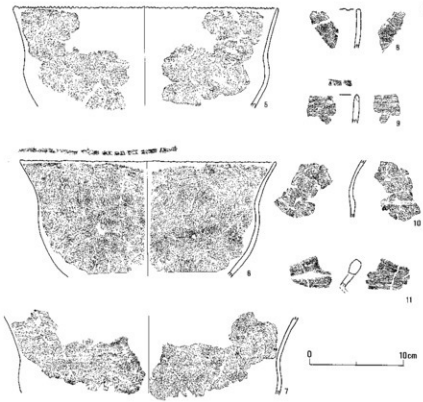
5は口径28cmに復元される。非常に器壁が薄く、2～3mmの部分がある。内外面とも調整はナデのようである。外面には部分的にススが付着している。口縁端部には細かなキザミを施し、波状口縁を形成している。

6は口径28cmの粗製土器である。口縁端部から下位10cmが残る破片である。内面はナデ、外面はケズリ仕上げのようである。口縁端部はキザミを施し、波状口縁になっている。色調は内外面とも淡黒灰褐色である。外面には部分的にススの付着が認められる。

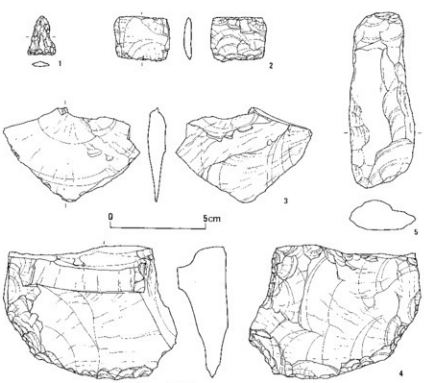
7は口縁端部を欠くが、口径32cm強で5・6と同様の器形に復元される。内面の調整はナデである。外面は頸部から口縁部にかけては条痕であるが、胴部はナデのようである。外面には部分的にススが付着している。色調は外面が淡黄褐色、内面が黒黄褐色である。

8～9は小破片であり、径を復元することができない。

8は深鉢の口縁部破片である。口縁端部は平坦でキザミをもつ。内外面ともミガキ仕上げの精製土器



第6図　土壙出土縄文土器2（縮尺1：4）



第7図　土壙出土石器（縮尺1：2）

である。色調は内外面とも淡黒色である。

9は深鉢の口縁部破片である。口縁端部にはキザミをもつ。内外面とも条痕調整である。色調は内外面とも淡黒色である。5～8・10に比べて器壁が厚い。

10は深鉢の頸部から口縁部にかけての破片である。調整は内外面ともミガキ仕上げである。色調は内面が淡黒色、外面が淡黒灰色である。

11は唯一の浅鉢口縁部破片である。山形をなす口縁端部は屈曲する器形である。調整は内外面ともナデのようである。色調は暗橙褐色である。

石　器（第7図）

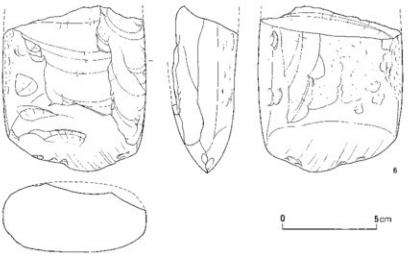
土壙内から出土した石器類には打製石鏃1点、楔形石器1点、同断片2点、削器1点、打製石斧1点と砕片、剥片がある。石斧以外はサヌカイト製である。

石鏃（1）は、長さ2.1㎝、幅1.45㎝、厚さ2.5㎜で基部はわずかに内湾する。

楔形石器（2）は高さ2.4㎝、幅2.8㎝、厚さ4㎜で、上下からの剥離痕が両面を覆っている。左右両端にはいわゆる裁断面が認められる。弥生時代の同種の一部と同様、石核であった可能性がある。

剥器（4）は厚さ2.5㎝の剥片を素材としたもので、高さ6.9㎝、幅9.2㎝。1側縁に海曲した鈍い刃部を形成する。剥片素材の石核を転用したと思われる。

打製石斧（5）は緑色片岩製で、長さ9.4㎝、幅3.4㎝、厚さ1.5㎝、重さ65ｇ。土壙からはサヌカイト以外に同種石材の石片数点が出土したが、この種の石器製作を示すものかどうかは不明である。



第８図　磨製石斧（縮尺１：２）

最大長が２㎝以上のものを剥片とした。６点あるが、剥離途中で折損したり明確な打面をとどめないものである。縁辺部に使用痕らしい小剥離の認められるもの１点があり、図示した（３）。

砕片は175点検出した。ほとんどが４㎜内外の小片である。

土壙から出土したサヌカイトは、表面が灰色の縞状を呈する比較的新鮮なものと、白灰色で風化が進んだものの２種が認められる。後者は少量である。

上記の石器以外に、試掘調査時に１号墳地山から出土した石斧（第８図）がある。緻密な砂岩製で、上半部を折損している。表面は新鮮で、刃部付近にかすかな条痕を留める。この線条痕は、表面の微妙な凹凸に関係なく認められ、光沢があり、表裏とも刃部から同方向に派生するという特徴をもつことから使用痕であると考えられる。刃部の片減りとあわせ、縦斧としての使用状況が復元できる資料である。

弥生時代の太形蛤刃石斧に対し、やや薄手であること、出土地点では弥生土器の出土を見ないことなどから、本石器についても縄文時代に属する可能性が高いと考えられる。

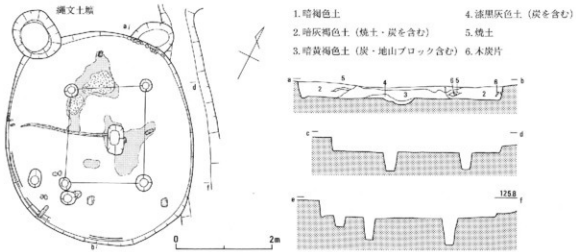
２．弥生時代

Ａ．１号住居跡

住　居（第10図）　低丘陵尾根部の平坦面に作られており、２号墳周溝により東辺上面が削りとられている。また、北西部辺で縄文時代の落とし穴とみられる土壙との重複がみられる。住居壁面の最大遺存深度は、南西辺で40㎝ほどである。

住居規模は、長径4.5m、短径４ｍの楕円ぎみの円形プランで、主柱は４本柱である。桁は南北方向が長い。主柱に対応する外壁は四方で角張り、こころもち隅丸状を呈する。中央穴は、口部直径約60㎝×30㎝の長楕円で、深さ約30㎝。住居中央部やや東よりにつくられている。床面西端部からは、幅10㎝、深さ5㎝ほどの浅い床溝が中央穴へと直線状に延びている。壁体下には、壁体溝とみられる溝が南西コーナーに部分的にみられるが、基本的には溝は掘られていない。北東辺の壁体下部に被し、拳大の川原石１数個が並べおかれていた。弥生後期の住居跡で時々観察される現象であるが、その機能については明らかとなっていない。

火災により廃棄された住居で、埋土中には建築材の炭化物、焼土などが多量にふくまれていた。床面

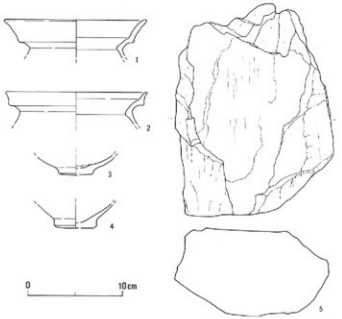


第９図　１号住居跡（縮尺１：80）

近くの焼土は大きなブロック状を呈し、それらブロックおよび比較的大きい炭化材は、中央穴をはさんだ南北部分の床面に多く残されていた。

遺物は、火災住居にしては少なく、床面付近から甕形土器口縁部片など少数が発見された以外、埋土中からもほとんど発見されなかった。床面には、南西の主柱付近に礎石として用いられたと見られる大形の角石材が研磨面を上に、また南東主柱外側に作業台に用いられたとみられる扁平な河原石が残されていた。

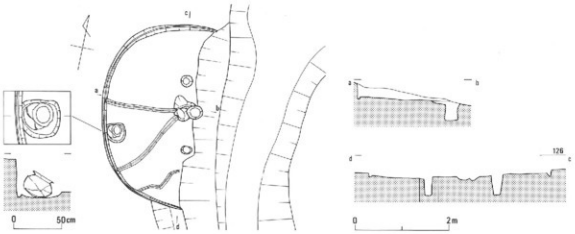
出土土器には、内面なで、外面刷毛目仕上げの甕形土器胴部破片、丹彩壺の胴部破片、二重口縁形の甕破片などがある。



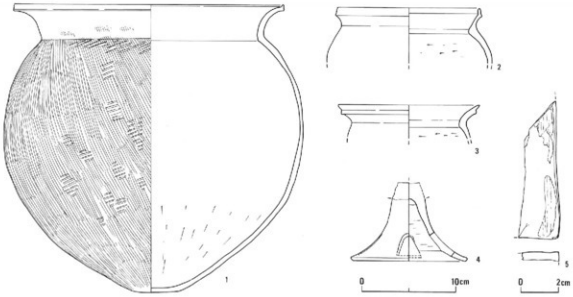
第10図　１号住居跡出土遺物（縮尺１：４）

出土遺物（第10図）　図示した土器はすべて甕形土器であるが、これ以外に丹彩壺形土器頸部下端破片、高杯形土器杯部破片などが発見されている。しかし、いずれも細片で総量もごくわずかである。

１は、口縁が大きく外方に立ち上がるいわゆる二重口縁を呈する甕で、８㎝×４㎝の破片。内外面とも器壁の荒れが激しく、仕上げ調整は明確に判別できない。口縁部内外面はよこなでにより仕上げられているらしく、外面の一部には丹彩の痕跡が残る。外面には煤の付着もみられる。内面頸部以下は篦削りで仕上げられているとみられるが、砂粒の動きが観察されず明確でない。胎土中には１～３㎜の砂粒を多く含む。２は、低く立ちあがる二重口縁を呈する甕で、約10㎝×４㎝の破片。内外面とも剥離激しく調整不明。口縁部内外面及び胴部外面はよこなでにより仕上げられ、胴部内面は篦削り仕上げとみられるが、砂粒の動きは観察できない。口縁部外面には丹彩痕跡が残り、煤も付着する。３は、甕形土器



第11図　2号住居跡（縮尺1：80）



第12図　2号住居跡出土遺物（縮尺1：4，1：2）

底部の4×3㎝の小片で、輪台法により成形されたとみられ、内外面及び底部もなでにより仕上げられている。胎土中には大粒の砂粒はほとんど含まれない。外面の一部には煤が付着する。4は甕形土器底部4×4㎝の小片で、3と同じく輪台法により成形されているとみられる。内外面ともなで仕上げで、胎土中には大粒の砂粒を含まない。5は、住居床面に残されていた大型の砥石で、20ｃｍ×15ｃｍ、厚さ10ｃｍの角割白然石の一部を研磨面に利用している。材質は頁岩とみられるが研磨範囲は12ｃｍ×5ｃｍの範囲に限られ、研磨面も石材の核による段を所々に残し、面白体も波打っている。研磨痕跡も小型製品の研磨に用いられた様子で、鉄製品ではなさそうである。

B．2号住居跡

住　居（第11図）　丘陵東縁斜面に位置する住居で、東半分を3号墳の深い周溝によって削り取られ、約半分を残すのみである。一辺約4ｍ前後の規模で、隅丸方形状を呈し、遺存最大壁高は西辺で約40㎝を図る。床面および壁面などでの痕跡は明瞭ではないが、堆積土中には炭や焼土などが多く含まれ、火災により廃棄されたものとみられる。1号住居とは異なり壁溝に幅10㎝ほどの浅い溝がぐるりと巡らされていた。

第13図　2号住居跡出土鉢拓影（1：4）

床面には住居主柱に相当する柱穴は発見されず、深さ5～6cmと浅い中央穴の南北両側に各1本の柱穴が検出された。西壁から2本の床溝が延び、それぞれ中央穴に接続する。また、南辺の床にはジグザグ状に浅い溝が残されていた。

西壁面下の床面には、口部が40cm角の方形を呈する深さ20cmほどの窪みが掘られ、その直上で大形の鉢形土器が据えられたような状態で発見された。この他の遺物としては、埋土中から変形の透孔をもつ高杯脚部破辺や、二重口縁状の丹彩甕破片、小型の砥石破片などが発見されている。

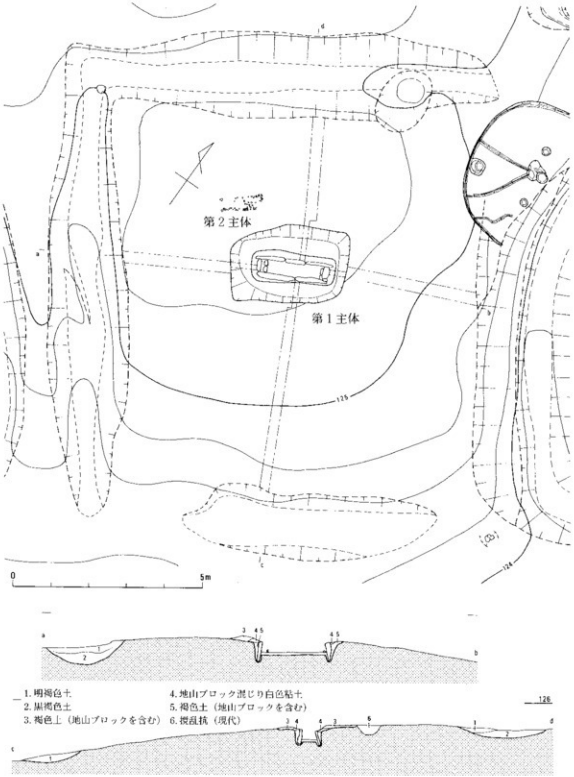
なお、中央穴東側で口部直径25～30cmの柱穴状の穴が発見された。位置からみて中央穴の掘りなおしともみられるが、底部位置は中央穴両側の柱穴それぞれと一致して、付加的な柱穴とみられる。

出土遺物（第12図）　1は、たたき成形による鉢形土器で内外面淡褐色を呈する。ほぼ完形に復元でき、本来は完形で火災住居に残されていたものと判断できる。強く外反する口縁部端部は上方にわずかに肥厚し、端面は平らにおさめる。口縁部内外面はよこなでで仕上げられている。胴部外面に右上がりの細かいたたき成形痕（第13図）をかすかに留め、たたきののち縦の刷毛目で仕上げ調整がおこなわれている。胴部内面は篦削りのあと上半2／3は、丁寧に篦削りの痕をなで消している。底部は丸みをもった平底で底面もなで仕上げされている。胴部下半及び肩部の2ケ所のところで接合によるとみられる変異があり、分割成形されたとみられる。胎土中には1～2mmの砂粒を多く含むが、大粒のものはない。　2は口縁部を低くつまみあげた甕形土器で、6×4cmの小片である。口縁部内外面はよこなで仕上げ、丹彩痕跡を留める。胴部内面は篦削り仕上げ。胎土中には1～2mmの砂粒を多く含む。外面に煤の付着がみとめられる。

3は甕形土器口縁部7×4cmの破片である。低く立ち上がる端部は外面で段をなし、外反する。口縁部内外面及び胴部外面もなで仕上げされ、胴部内面は篦削りが加えられている。胎土中には1mm前後の砂粒が多く含まれる。

4は高杯形土器脚部破片で、筒部を残し、一部の破片は脚裾部に到る。杯部との接合部分には接合剥離痕が残され岩製成形されたものであることが分かる。内外面とも淡褐色を呈し、焼成時の黒斑が広くおおう。外面はよこなで仕上げ、内面は篦削りのあと、脚端部をよこなで仕上げされている。遺存部分に3孔の透孔跡が残され、本来あいたいする位置に4孔の透孔が備わっていたものと推定される。透孔全体が完存する部分はないが、想定されるその形状は特異で例があみたらない。すなわち透孔上辺は半円を呈し側辺は裾広がりの直線を呈する。対応する辺及び下底辺は遺存しないが、ほぼ実測図のようなアーチ状の透孔を想定できる。透かしは、篦でシャープに切り込まれている。胎土中には小粒の砂が含まれるが、大粒のものはなく、良質の粘土を用い丁寧に焼成されている。

5は、粘板岩製と考えられる小型砥石の破片で、2cm×7cm、厚さ5mmを残す。上面及び側面の一端を研磨に使用し、小口の一辺に本来の加工の痕を残すが、残り部分については破損により形状不明である。研磨面は平滑で、小型の鉄製品の研磨に使われたのではないかとみられる。



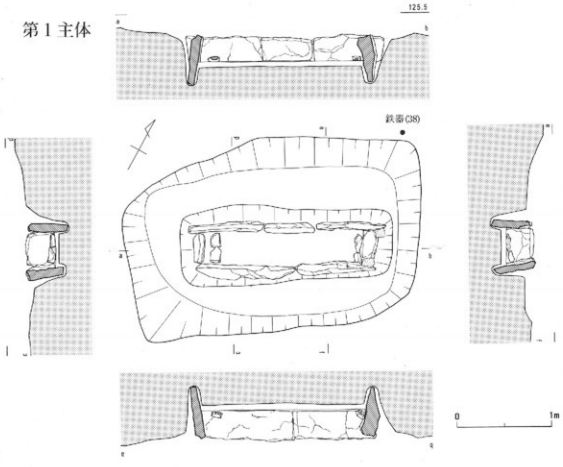
第 14 図　押入兼田１号墳（縮尺１：100）

３．古墳時代

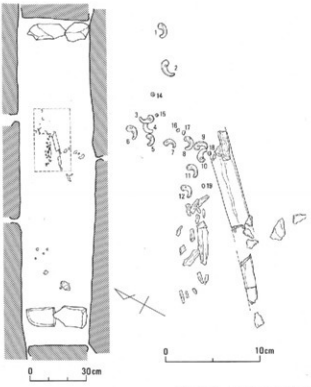
A．１号墳

墳　形（第 14 図）　西側はし字形、北東・南東側は断片的ではあるが直線的な周溝が存在し、ほぼ方形に区画されている。北東側の周溝は３号墳の周溝によって削られているため、周溝外側の肩が存在しな

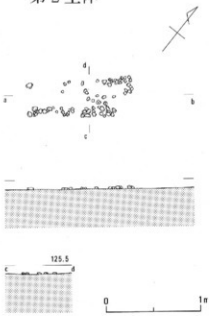
第１主体



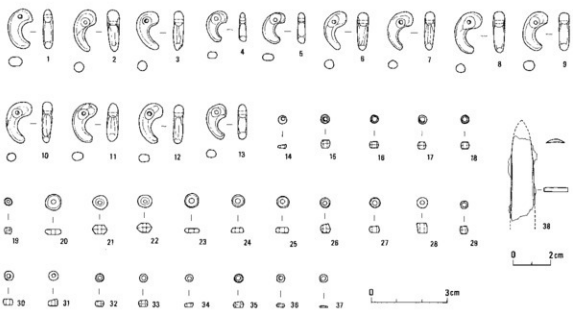
第１主体遺物出土状況



第２主体



第15図　１号墳埋葬施設（縮尺１：40 他）



第16図　1号墳出土遺物（縮尺2：3，1：2）

い。周溝の幅は1.3～2 m、深さ最大で0.65 mを測る。周溝の埋土は2層で、上層は明褐色土、下層は黒褐色土である。内部からの出土遺物は南西側周溝下層から弥生土器片がある。また、現状では盛土はほとんど存在しないが埋葬施設の蓋石がすでに動いている事から、若干の盛土（埋葬施設の覆土）が存在していたものと考えられる。本墳は一辺11 m、現状で高さ1.15 m程の方墳である。

埋葬施設（第15図）墳丘の中央に箱式石棺1基が存在し、その西側に埋葬施設とはほつきりとしない礫の散布（礫床？）が検出された。ここでは前者を第1主体、後者を第2主体とする。

第1主体（第15図）　第1主体は箱式石棺である。蓋石の一部はすでに散逸しており、現存する3枚も表土除去時にすでに動いているため、蓋石の正確な位置については明瞭でないが、これら現存する蓋石は西小口側に使用されていたものである。箱式石棺の掘り方は長さ3.1 m、東小口側の幅1.6 m、西小口側の幅1.5 m、中央幅2.1 mのやや不整形な隅丸長方形状である。そこから比較的緩やかな浅い掘りこみがあり、石材を埋める部分がさらに深く掘り込まれ、2段掘りの形状となっている。この部分の掘り方は長さ2.25 m、東小口幅0.7 m、西小口幅0.75 mを測る隅丸長方形状である。土壙関係から蓋石をした段階で白色粘土（第14図4）で目張りをおこない、さらにその上に地山ブロックを含む褐色土（同5）で全体を覆っているようである。両小口の石は長さ0.5 m、幅0.3～0.35 m程の平らな石で、この石を立て半分程を埋め込んでいる。また、北側壁は3枚、南側壁は2枚の長方形状の石からなる。これら石は小口石程は深く埋め込んではいない。石棺の内法は全長1.73 m、東小口幅0.38 m、西小口幅0.33 m、床面までの深さ0.3 m程である。両小口には枕石と思われる石がある。いずれも2個の石からなるが、東小口の石はあまり平らでなく、西小口に比べると小ぶりでやや南側によっている。西小口の枕石は平らな石である。床面には石などによる施設は無いが、深さ8 cm程比較的緻密な土で埋めて作られている。この石棺の内部には人骨の一部が部分的に残存しており、特に西小口の枕石寄りで頭蓋骨の細片と歯が10数点出土している。また、中央東小口側には大腿骨の一部と思われる大きめの破片が見られる。そのため少なくとも西小口側が頭位で1体埋葬されているようである。東小口の枕石に伴う骨は検出されていない。副葬品としてはこの大腿骨付近から勾玉などの玉製品がまとまって出土している。出土状況から一連のものであったと推測されるが、出土位置は足の膝付近であるため、どのような状況で副葬されてい

単位：mm

番号	種別	長さ(径)	厚さ	孔径	材質	色調	番号	種別	長さ(径)	厚さ	孔径	材質	色調
1	勾　玉	16.0	4.0	1.5	蛇紋岩	濃緑灰色	20	臼　玉	7.0	2.5	1.5	蛇紋岩	淡緑灰色
2	〃	17.0	5.0	1.0	〃	淡緑灰色	21	算盤玉	6.0	4.0	2.0	〃	〃
3	〃	16.0	4.0	1.5	〃	濃緑灰色	22	〃	6.0	4.0	1.5	〃	〃
4	〃	12.0	2.5	1.5	〃	〃	23	臼　玉	6.0	2.0	2.0	〃	〃
5	〃	13.0	3.0	1.5	〃	〃	24	〃	5.0	2.0	2.0	〃	〃
6	〃	15.0	5.0	1.5	〃	〃	25	〃	5.0	2.0	2.0	〃	濃緑灰色
7	〃	15.5	4.0	1.5	〃	淡緑灰色	26	算盤玉	4.0	4.0	1.5	〃	〃
8	〃	17.0	4.0	1.5	〃	〃	27	臼　玉	4.0	3.0	2.0	〃	〃
9	〃	15.5	4.0	1.5	〃	〃	28	〃	4.5	4.0	1.5	不　明	濃青灰色
10	〃	16.5	4.0	1.5	〃	濃緑灰色	29	算盤玉	3.5	3.5	2.0	蛇紋岩	濃緑灰色
11	〃	15.5	4.5	1.5	〃	〃	30	臼　玉	4.0	3.0	2.0	〃	〃
12	〃	16.0	4.0	1.5	〃	淡緑灰色	31	〃	4.0	3.0	1.5	〃	淡緑灰色
13	〃	14.0	3.5	2.0	〃	濃緑灰色	32	算盤玉	3.5	2.5	1.5	〃	濃緑灰色
14	臼　玉	3.0	1.5	1.5	〃	〃	33	〃	3.5	3.0	2.0	〃	淡緑灰色
15	算盤玉	3.5	3.5	1.5	〃	〃	34	臼　玉	3.5	2.0	1.5	〃	〃
16	〃	3.5	3.5	2.0	〃	〃	35	算盤玉	4.0	3.0	2.0	〃	〃
17	〃	3.5	3.0	1.5	〃	〃	36	〃	3.5	1.5	1.5	〃	〃
18	〃	3.5	3.5	2.0	〃	〃	37	臼　玉	3.5	1.0	2.0	〃	濃緑灰色
19	〃	3.0	3.0	1.5	〃	〃							

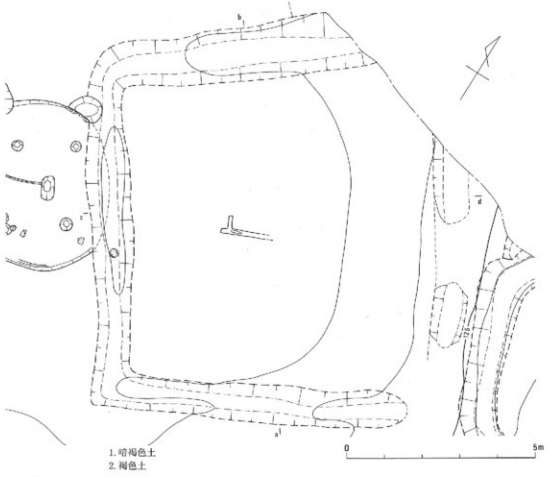
第１表　１号墳第１主体出土玉製品組成表

たのかは定かでない。ただこれら玉製品のほとんどが骨の下側から出土しているため、東小口側に最初に埋葬された人物に伴うものであった可能性もあり、その場合は頭元付近である。調査時には勾玉の数に対して小玉の数が少なかったが、排土の洗浄で削合的には勾玉１に対し小玉２に近くなった。そのため勾玉と勾玉の間にこれら小玉が２個程配されて一連になっていた可能性が考えられる。尚、人骨の性別等は不明である。また、その他の遺物として、掘り方の北側コーナー外側（第15図）から鉄器片が１点出土している。掘り方の外ではあるが、本埋葬施設に伴うものと解釈した。これら石棺の石材の内、蓋石は角礫凝灰岩で、東小口の枕石は花崗岩と石材不明石、西小口の枕石は２個とも花崗岩である。石棺の主軸はN－60°－Eである。

第２主体（第15図）　埋葬施設であるかは定かではないが、拳より小さい礫の散布が長さ1.1ｍ、幅0.4ｍの範囲に見られる。これら礫はレベル的には第１主体の掘り方上面とほぼ同一であり、第１主体の蓋石がすでに散逸している事から推測しても、かなり上部が削平されているものと考えられる。そのため、どのような構造であったかは明瞭でない。また出土遺物は皆無である。

また、第１主体と第２主体の間の西側で門形に置かれた石の配列を検出している（図版7-3参照）。直径0.5ｍの範囲に12個の石を配している。レベル的には第２主体の礫面と同じだが、出土遺物も無く本１号墳に伴うものかは定かではない。

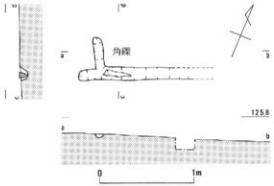
出土遺物（第16図）　副葬品は第１主体からのみ出土している。蛇紋岩製（分析は岡山理科大学自然科学研究所　白石純氏にお願いした）と考えられる勾玉13点と小玉27点がある。その内勾玉１点、小玉21は石棺内埋土の選別時に見つかったものである。その中で図示したのは勾玉13点と小玉24点である。残りの小玉３点の内２点は細かく砕けていて図示できず、もう１点は洗浄時に跡形もなく壊れてしまった。勾玉は全長12～17、厚さ2.5～5、小玉は径3～7、厚さ1～4で、この小玉は一般的な臼玉と算盤玉とがある。また、色調は大まかに濃緑灰色と淡緑灰色の２種類がある。玉類の詳細は観察表（第１表）を参照していただきたい。また、掘り方の外で出土した鉄器（38）は、現存する長さ4.5㎝程で両端は欠損するが、刃先部分がありヤリガンナと考えられる。



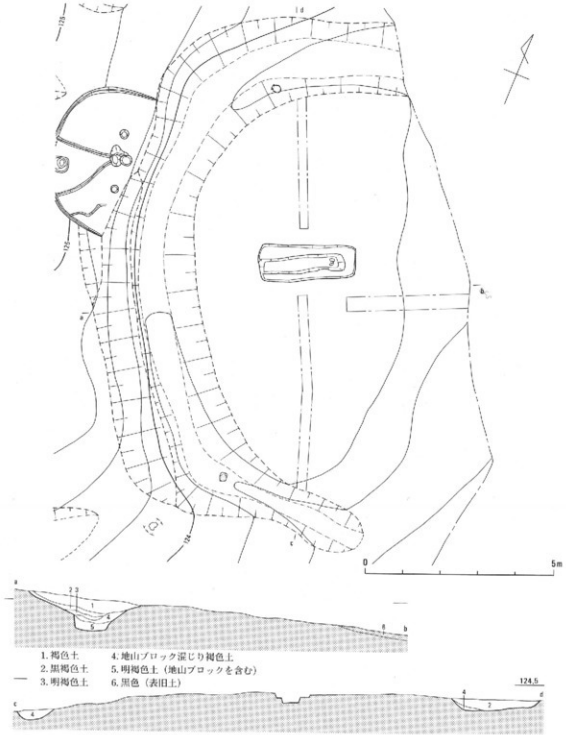
第17図　2号墳（縮尺1：100）

B．2号墳

墳　形（第17図）　1号墳の北西約1ｍ、丘陵の最高所に位置する。竪穴住居1と西側の周溝部分で重複している。周溝は直線的にめぐり、北東部は調査区外にのびている。東側は削平されており、部分的に残っている。周溝の幅は1～1.4ｍ、深さは0.1～0.3ｍを測る。埋土は北側・南側では1層で暗褐色土、西側では2層で上層が黒褐色土、下層が褐色土である。盛土は現状ではまったく存在しない。西側の周溝内部からは直径20㎝程の円礫が底部から約7～8　㎝浮いた状態でみつかったほか、土師器片が1片出土した。土師器片は小片であるため、器種、時期などは不明である。本墳は一辺8ｍ程度の方墳と考えられる。



第18図　2号墳箱式石棺痕跡（縮尺1：40）



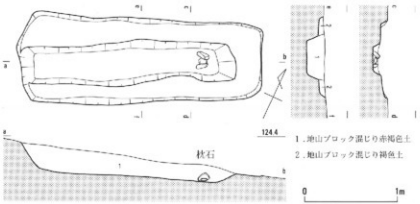
第19図　3号墳（縮尺1：100）

埋葬施設（第18図）　埋葬施設は検出されなかったが、墳丘の中央にあたる部分を精査したところ、幅0.1m、深さ5～10cmで東側が長いT字形の掘り込みが検出された。東西方向の掘り込み内部には長さ25cm、幅5cm、厚さ4cm程度の石がみられた。この掘り込みの検出位置が墳丘の中央部分にあたることや、長軸方向が1号墳の埋蔵施設の主軸の方向と同様であることなどから、掘り込みは埋葬施設の痕跡で、この位置に石棺が置かれていたものと思われる。内部に存在した石は1号墳の石材と同じ凝灰岩で、箱式石棺の一部であると考えられる。

C．3号墳

墳　丘（第19図）

3号墳は調査区の東端に位置し、その東側約1／3は調査区外である。径約12ｍの円墳である。墳丘の盛土はすでに失われており、調査時には表土直下がすでに地山であった。ただ、調査区の東端に近い部分には黒色の旧表土の残存がわずかながら認められた。

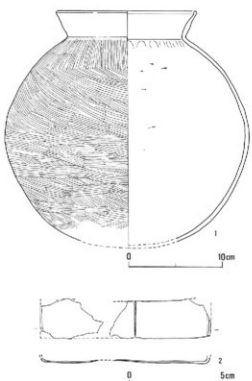


第20図　3号墳埋葬施設（縮尺1：40）

周溝は西側で幅約3ｍ、深さ約80㎝であり、墳丘外側は途中に段が付き、2段掘りになっている。この周溝は1号墳の周溝を切って作られており、このことから3号墳は1号墳よりも新しいことが理解できる。

埋葬施設（第20図）　墳丘の中央よりもやや西に偏して木棺直葬の主体部が存在した。この主体は掘り方が東西2．6ｍ、南北1．0ｍ、深さは残っている部分で25㎝程度のものである。木棺の痕跡はその中で西に偏して東西2．3ｍ、南北0．5ｍの範囲で認められた。木棺痕跡の中には東側に拳大よりもやや大きい円礫が3つ、中央のものが低くその両側がやや高い位置で据付けられており、これが枕石と考えられることから頭位は東と推定できる。

出土遺物（第21図）　出土遺物として、墳丘内外から土器・鉄器などが出土している。順次説明する。

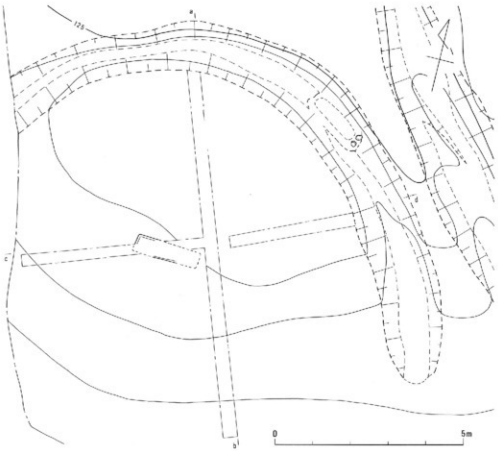


第21図　3号墳出土遺物（縮尺1:2,1:4）

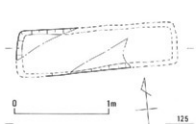
主体部内からは土師器と思われる土器の細片が2点出土しているが、器種等詳細は不明であり、図示し得ない。

周溝からは土師器の甕及び鉄器の破片が出土している（第21図）。1は土師器甕である。口径14.6㎝、器高25㎝程度、最大径26㎝である。胴部は球形に近く、外面は肩部は縦方向・その外は斜め方向のハケ目、内面は口縁部付近に指頭圧痕が認められ、その他はヘラ削りが施される。底部は残存していないため不明である。口縁部は外側にまっすぐ立ちあがり、端部内面には凸部が認められ、内外面ともに横方向のナデ仕上げである。2は鉄器の破片である。2片の細片であり、大きい方が5×2㎝程度、小さい方が3×2㎝程度である。ともにごく薄く、錆ぶくれの部分を除くと最大でも1程度の厚さしかない。表面は錆に覆われているが、両端が両端がわずかに折り返し気味になっており、手鎌ではないかと思われる。

またこの古墳に直接伴うものではないが、墳丘の地山直上の旧表土から土器片がいくつか出土してい



第22図　4号墳（縮尺1：100）



第23図　4号墳埋葬施設（1：40）

る。これについては本章の第4項で他の遺物とともに説明する

D．4号墳

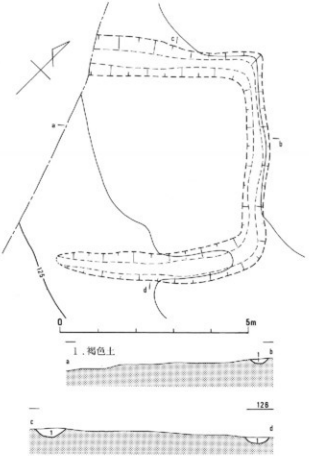
墳　丘（第22図）　調査区の南西に位置し、1号墳に隣接する円墳。周溝同士が切り合うことはないが、最も近接したところでは周溝端同士の距離は0．5mにすぎない。同様に、北西側には5号墳が位置する。丘陵上面平坦部の南辺に存在する。

北側に周溝を墳丘の約半分程とどめる。墳丘は、東西径推定12m、現状の高さ0．7m。周囲を掘削して盛り上げただけの構造で、葺石や埴輪といった外表施設は認められない。周溝の東側は途中で消失し、西側は過去の工事により破壊されていた。周溝は、幅1．1～1．6m、深さ0．3～0．4mで、暗褐色土が堆積していた。

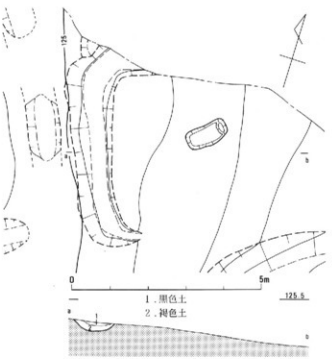
墳丘の上部は削平されていて、盛土は残存しない。墳丘中央の一部に、古墳地山である旧表土および褐色土などの堆積を認めた。試掘調査時にこの部分が落ち込みとして認識されたため、古墳に先行する何らかの遺構が存在するものとみて精査したが、明確な遺構としては確認できなかった。ただ、この地山部分から弥生土器が出土した。これについては次項で説明する。

埋葬施設（第23図）　墳丘中央で、長軸が東西方向の土壙を検出した。黄褐色土の地山に穿たれたもので、長さ約1.7ｍ、幅0.5ｍ、深さ10～15㎝。土壙内部には比較的硬い赤褐色土が堆積していた。周辺に存在する地山の落ち込みの影響もあり検出に手間どったが、埋葬施設と考えてよい。おそらく3号墳と同様の2段掘りの木棺墓で、墳丘削平の結果下段の墓壙だけが残ったものと思われる。土壙底面は平坦で、使用された木棺は箱形のものであったと推測される。壙内からは枕石などの施設や遺物は検出されなかった。

これとは別に、北東の周溝底に埋葬施設の可能性がある落ち込み1箇所を検出した（第22図）。周溝の下底部はおおむね平坦であるが、この部分だけ長さ1.8ｍ、幅0.6ｍ、深さ20㎝の土壙状を呈する。壁面の立ち上がりは緩やかで、土壙の南東端に径20㎝程の川原石2個を検出した。これらは土壙堀方の上面近くに位置していて、上面が壙底から20㎝以上浮いていることから、これらを直ちに枕石とするのには躊躇せざるをえない。ここでは、周溝中に埋葬施設が存在した可能性を指摘するにとどめる。



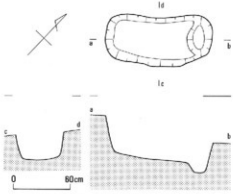
第24図　5号墳（縮尺1：100）



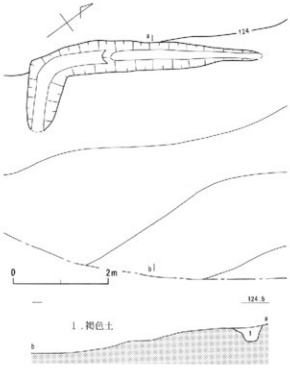
第25図　6号墳（縮尺1：100）

E．5号墳

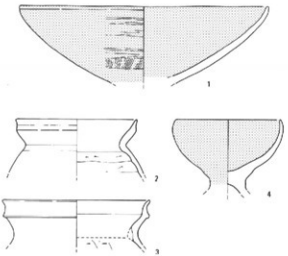
墳　形（第24図）　4号墳の北西約2ｍのところに位置する。周溝はコの字形に存在し、北側は調査区外に続く。周溝の幅は0.5～1.2ｍ、深さは0.1～0.2ｍを測る。埋土は1層で褐色土である。現状で盛土



第26図　6号墳土壙（縮尺1：40）



第27図　段状遺構（縮尺1：80）



第28図　弥生土器・土師器（縮尺1：4）

は存在しない。遺物は出土しておらず、正確な時期は不明である。墳丘の中央部を精査したが、埋葬施設は確認できず、削平されたものと思われる。本墳は一辺5m程度の方墳と考えられる。

F．6号墳

墳　形（第25図）　調査区北東端の斜面につくられている。西側のみ周溝が存在しており、北側は調査区外へのび、南側はわずかにみられる程度である。周溝の幅は約1m、深さは0．2mを測る。埋土は2層で上層は黒色土、下層は褐色土である。現状で盛土は存在しない。本墳は一辺4m程度の方墳と考えられる。

埋葬施設（第26図）　墳丘の中央にあたる部分を精査したところ、東西1.2m、南北0.5m、深さ0．3mを測る隅円方形の土壙が検出された。土壙内は東側がやや深くなっており、土壙底面からの比高差は0.15mである。この土壙は他の1号墳や3号墳のように古墳の東西方向の一辺と平行につくられておらず、主軸が若干北へ傾いており、古墳の埋葬施設であるかどうかは疑問が残る。ここでは可能性を指摘するにとどめておく。

4．その他の遺構と遺物

A．段状遺構（第27図）

調査区の南東端の斜面につくられている。等高線に平行して平面L字形の溝が検出された。溝は等高線に平行してつくられており、下方へ直角にのびている。長さ4.8m、幅0.5m、深さ約0.3mを測り、下方にのびる部分の長さは1.6mである。溝の内側に柱穴などは存在しない。

遺物は出土しておらず時期は不明であるが、方墳の周溝の隅が残存していたものであるとすると、1号墳の南東部に別の方墳が存在していた可能性も考えられる。ここでは遺構の形状から段状遺構とする。

B．土　器（第28図）

調査の過程で、遺構に直接伴わない土器が若

干量出土している。それらのうち実測が可能なものを第28図に図示した。弥生土器（1・3・4）と土師器（2）がある。

1は4号墳の墳丘中央部の地山から出土した高坏形土器の坏部で、半分ほど遺存する。口径26㎝、深さ8㎝の浅い鉢形を呈する。器肌荒れが激しいが、内外面に丹塗痕跡をとどめる。胎土には、長石や石英など通常見られる鉱物以外に、いわゆるシャモットといわれる数㎜大の褐色粒を特徴的に含む。ハケメ調整後、ヘラ磨きして仕上げる。口縁端部近くにヨコナデ調整によると思われる浅い条線がある。

3は甕形土器の小片で、1号墳の西側周溝から出土した。短外湾した二重口縁をもち、口径15.3㎝に復元される。

4は3号墳西側周溝内から出土した高坏形土器で、やはり坏部だけの遺存である。口径11㎝、深さ5.4㎝の椀状。脚台は低く広がる形態で、接合部の外面には成形時の指頭圧痕をとどめる。

以上は弥生土器で出土位置からみて、3は1号住居跡に、4は2号住居に由来した可能性が高い。

2は3号墳の旧表土から出土した土師器の甕形土器である。緩やかに立つ短い二重口縁の形態からみて、古墳時代前期後半から中期前半にかけてのものと考えられる。古墳群に近い時期のものであるが、同時に出土した土器はいずれも細片のため、本資料が3号墳の築造に確実に先立つものかどうか不安な点もある。

以上の土器の他に、1号墳の南東隅にあたる位置から土師器胴部の破片が出土している。実測不可能だが、最大径は30㎝以上に復元される。甕形土器か壺形土器か判別できない。上半部外面はタテハケのあと横位のハケメを施す。出土位置からみて、1号墳に供献されたものの可能性がある。

Ⅳ 考　察

1．縄文土器

今回の調査で出土した縄文土器は一括遺物で同一時期のものと考えられる。この縄文土器の編年的位置付けについて検討することにする。

本資料は津山市内では初めての出土例である。近隣では最近、奥津町久田原遺跡でこの種の土器が出土している（註1）。従来から知られているもので、最も本遺跡出土のものに類似していると考えられるものには北房町谷尻遺跡No.130上壙出土の資料（註2）があげられる。この資料は突帯文土器を除いた縄文時代晩期を大きくⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期の3時期に分けた時のⅡ期の新段階に位置付けられている（註3）。他に鳥根県頓原町板屋Ⅲ遺跡旧河道出土の資料（註4）などもこれに併行する時期のものと考えられている。

しかし、細かく見ると谷尻遺跡出土のものは爪形文あるいは押引刺突文が多用されるのに対して、本遺跡出土のものはそれがあまり顕著ではない。この差は多少の時期差としてとらえられ、前者の方が新しく後者の方がやや古い様相をもっているということができそうである（註5）。いずれにしても、新たに一型式を設定して編年に組み入れるような時期差ではなく、古い様相という範囲でとらえておきたい。

2．弥生時代

今回の発掘調査面積は、ヘリポート建設予定地約850㎡に限られ、発見遺構も住居二棟のみと、弥生遺跡の性格については多くを語れない。また、出土土器も1点の例外を除きいずれも数cm角の摩滅の激しい細片に限られ、性格の解明の手がかりは薄いといわざるを得ない。そのことを前提にしていえば、立地としては狭小な眉尾根に位置し、もともと大規模な集落の一部であったとは考えにくい。また、二棟の住居跡ともに出土土器は同一型式のなかに収まる可能性が高く、古墳の調査にともなって発見された少数の弥生土器も同一型式に収まるとみてよいものに限られる。そのことからいえば、短期間に営まれた小規模集落の一部であった可能性が高い。なお、後期の火災住居は豊富に遺物の残されるのが通例であるが、二棟とも火災廃棄されているのに、共に遺物の少ないことはそのことと関連しているのかもしれない。なお、2号住居跡でははっきりしなかったが、1号住居では炭化材の上を厚く焼土が覆い、その現象は特に住居中央部でよく観察されたことから、土葺き屋根の可能性が推測された。

さて、住居の所属時期であるが、2号住居出土の鉢と高杯については特異で、それについては後にふれるとして、この地域で類例のあるその他の土器にあたると、1号住居出土の1の二重口縁甕は大田十二社遺跡などで多く発見されており、大田十二社遺跡の13号住居跡出土のやや古手のものに最も形態的に類似している。また、2の低く外反する口縁をもつ甕口縁遺跡破片も同遺跡の13号住居跡に同じく類例がある。2号住居跡出土の2の甕口縁部破片は、大田十二社遺跡袋状貯蔵穴P-63に類似形態のものが存在し、3の甕口縁部破片は一貫東遺跡袋状貯蔵穴SC98の甕口縁とつくりが似ている。

いずれも大田十二社遺跡の編年でいえば3期に併行するもので、1，2号住居跡とも大田十二社遺跡編年の3期に位置づけられよう。なお、大田十二社遺跡編年の3期は県南部編年の上東鬼川市Ⅲ式から才ノ町Ⅰ式におおむね対応する。津山で器壁表面にたたき痕跡を残す個体が発見されるのは、大田十二

社遺跡編年の４期以降のことで、編年が正しいとすれば、２号住居跡出土のたたき成形土器はそれらのなかで、最も古い位置づけが与えられることとなる。

そのことを前提に、２号住居跡出土の１の鉢形土器及び４の高杯形土器の特異な性格について考えてみよう。この種の鉢形土器は、播磨長越遺跡や関東のたたき成形土器のなかで類品がみられるが、いずれも時期的には後出するもので、当該期の出土品のなかにはほとんど例がない。四分割して成形する手法、縦口のたたき痕跡など、少なくとも美作以外の上器伝統のなかで製作された土器であることはほぼ疑いがない。美作でしいて類例を探すとすれば大田十二社遺跡の袋状貯蔵穴Ｐ４２出土の鉢に共通の要素が見出されるが、これとて大田十二社遺跡のなかでは特異な存在であった。しかもその鉢も本例より一時期後出する。あわせて、４の高杯は胎土も異質で焼成堅緻であるが、なにより透孔の形状は特異で、弥生後期の高杯には類例をみないばかりか、脚部にこのような大きな透孔を用いること自体弥生土器の伝統に反する。あえてこのような透孔を用いる理由は、特別な伝統に由来するからとしか考えられない。

同時期の同種の透孔の類例を求めると、朝鮮半島の瓦質土器高杯あるいは台付壺脚部の透孔にたどりつき、１の鉢形土器の特徴からみても両者に朝鮮半島の土器との類縁性が考えられる。日本海側で同種の資料の発見が進み、また朝鮮半島の同時期の土器資料がつまびらかになれば、これらの土器と朝鮮半島の土器との関係、庄内、布留期の土器との関係などを探る手がかりとなるかもしれない。

３．古墳時代

今回検出した押入兼田古墳群について若干のまとめをおこないたい。丘陵の頂部を中心に現状では６基からなる古墳群である（第２表）。ただ古墳群の南側はすでに削平されており、北側調査区外にも古墳が存在する可能性があるため、古墳の実数はさらに増える公算が高い。古墳の立地を見ると隣接はしているが、周溝を共有する事はほとんど無く、１・３号墳のみ切り合っている。そのため連綿と作られている感があり、ある程度近接した時期に相次いで作られた古墳群と推測される。現状で本古墳群は円墳２基、方墳４基からなる。その中でも立地的に言えば、頂部稜線上に作られている１号墳が一番見晴らしの良い立地である。この１号墳の両平野部側は３・４号墳の円墳が作られ、さらに北側は一辺10ｍ以下の方墳（２・５・６号墳）が作られている。この１号墳は一辺11ｍ、３・４号墳は直径12ｍ程の円墳であるため、両者を比べると表面積的には１号墳の方が広く、さらに視覚的にも大きく感じる。また、埋葬施設として使用されているのは１号墳は箱式石棺、３号墳は木棺である。また、４号墳も石材を使用しない可能性が大きく、方墳の２号墳は箱式石棺である。その他の５・６号墳は明瞭でない。以上から方墳には箱式石棺が、円墳には木棺が主として使用されるといった約束事が存在する可能性が高い。美作地方の円・方墳からなる古墳群で良く似た関係のものがある。津山市勝レ塚古墳群（註６）は方墳は

番　号	墳　形	規模（一辺・直径×高さ、単位m）	埋葬施設	副葬品	備　考
1	方　墳	11×1.15	箱式石棺	勾玉、小玉	周小口に、人骨片、墓壙外から鉄鏃片出土
			礫　床？		
2	方　墳	8×0.5	箱式石棺	不　明	箱式石棺底部のみ、一部石材あり
3	円　墳	12×0.5	木　棺	無　し	枕石、周溝内から土師器、鉄鏃片が出土
4	円　墳	12×0.7	木　棺	無　し	周溝内に埋葬施設？
5	方　墳	5×0.4	不　明	不　明	
6	方　墳	4×0.4	土壙墓？	無　し	

第２表　押入兼田古墳群一覧表

箱式石棺、円墳は石蓋土壙墓で墳形によって埋葬施設の構造が異なる。ただこのような約束事が一概に言えない場合がある。久世町中原古墳群（註７）は、方・円墳32基で、埋葬施設はすべて箱式石棺である。両墳形の違いは、立地面では円墳の方が比較的平坦な部分に造られ葺石を伴うものがあるぐらいである。そのため、墳形と埋葬施設の関係は一概には論せず立地面、地域性、さらには時期差なども総合的に解釈せねばならない。

次に時期について検討したい。時期については３号墳出土の土師器や１号墳出土の玉製品などから考えてみたい。特に３号墳の甕は底部以外はほぼ完形に復元できる。口縁がくの字に外反し端部はやや内側につまみ、胴部は球形に近く胴の張りに対して口径が小さい。これはいわゆる布留系の甕の範疇である。その中でも胴の球形を重視すれば布留２～３式併行（註８）となるが、口径が胴の張りに対して小さく、胴部がしもぶくれ状の特徴から言えばもう少し新しくなり、布留４式併行頃となる。これは吉備地方の土師器編年で言えばⅡ期（註９）、高橋編年12期（註10）頃と考えられる。また、蛇紋岩製や滑石製の玉製品は５世紀を中心に見られるものと考えられてはいるが、滑石製は前期後半の出土例もある（註11）。本例に良く似た勾玉で滑石製が総社市西山26号墳（註12）から出土しており、時期は５世紀中～後葉である。また、滑石系とされる勾玉は同長砂10号墳（註13）からも出土しており、５世紀前半とされる。

美作地方での古墳群について従来の知見を簡単に整理すると、円墳と方墳を主体とする古墳群は少なくとも４世紀代から見られ円墳の優位性が考えられるもの（近長丸山古墳群、註14）が多く、主たる埋葬施設は木棺である。方墳を主体とする古墳群の内、盛土がほとんど無く箱式石棺をもつもの（鎗レ塚古墳群、註６）は土器や副葬品の出土が少なく時期決定に欠けるが、ほぼ５世紀代を中心としたものと考えられている。さらに５世紀末以降は円墳が主体となり、盛土によって墳丘が構築され、須恵器などが多数副葬されている（長畝山北古墳群など、註15）。本古墳群では盛土はほとんど無く須恵器が１点も副葬されていない事、土師器の特徴は他の器種での比較はできていないが、ほぼ５世紀前半にかけてのものである事、蛇紋岩や滑石製玉製品の類例がおもに５世紀代によく見られるものである事から、これらを総合的に解釈すると、須恵器の副葬が美作地方ではまだ一般化しない５世紀の前半代が本古墳群の所属時期と推測され、相次いで築造されたものと考えられる。

註

1　岡山県古代吉備文化財センターが調査。報告書未刊。
2　高畑知功他「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告１１』岡山県教育委員会 1976
3　平井　勝「弥生時代への移行」『吉備の考古学的研究（上）』山陽新聞社 1992
4　角田徳幸他『板屋Ⅲ遺跡』建設省中国地方建設局・島根県教育委員会 1998
5　高橋　護氏のご教示による。
6　小郷利幸・行田裕美「鎗レ塚古墳群・クズレ塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第31集』津山市土地開発公社・津山市教育委員会 1990
7　福田正継他「中原古墳群他」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告93』日本道路公団広島建設局津山工事事務所・岡山県教育委員会 1995
8　寺沢薫他「矢部遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊』奈良県立橿原考古学研究所 1986

9　高畑知功他「集成 11 土師器」『吉備の考古学的研究（下）』山陽新聞社 1992
10　高橋護「土師器の編年 3 中国・四国」『古墳時代の研究 6　土師器と須恵器』雄山閣 1991
11　岡川尚功「玉とガラス」『古墳時代の研究 5　生産と流通　』雄山閣 1991
12　柴田英樹他「西山遺跡・西山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 121』日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1997
13　村上幸雄「長砂古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告 5』総社市教育委員会 1987
14　小郷利幸「近長丸山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 41 集』津山市教育委員会 1992
15　行田裕美・木村祐子「長畝山北古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 45 集』津山市教育委員会 1992

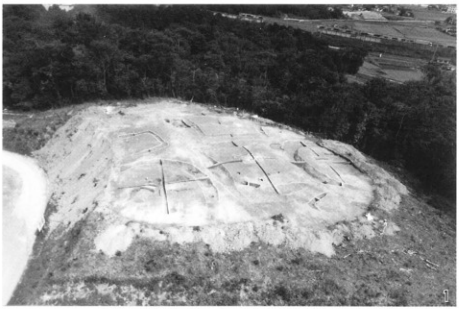
図　版

航空写真撮影風景

1. 押入遺跡
遠景（西から）

2. 同　上
（東から）

2. 同　上
（南から）



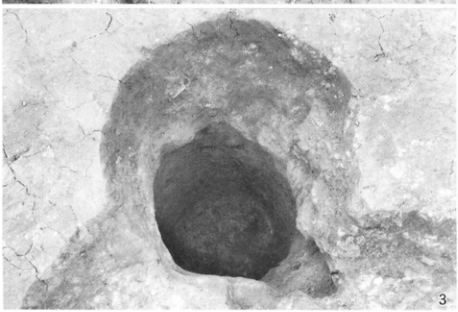
1. 押入兼田遺跡
全景（南から）

2. 同　上
（南から）

3. 確認調査風景

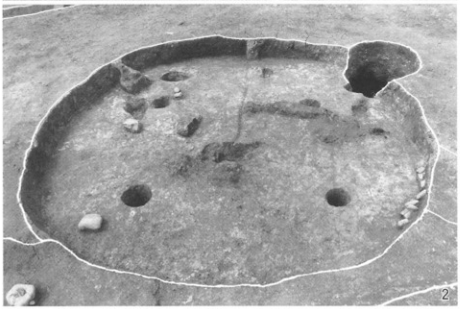
1. 土壙調査風景

2. 土壙遺物
出土状況

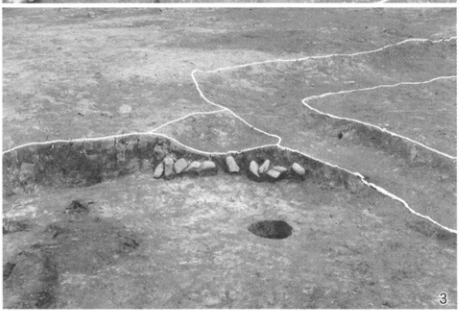


3. 同　上
掘り上げ後

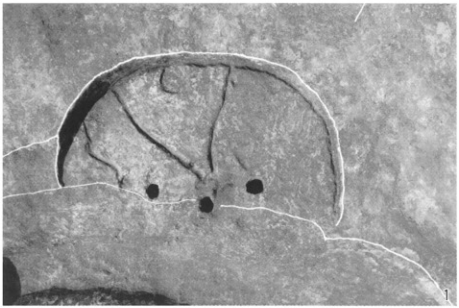
1. 1号住居跡



2. 同　上



3. 同　上
石出土状況

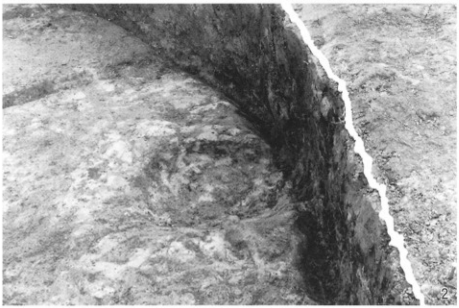


1．2号住居跡

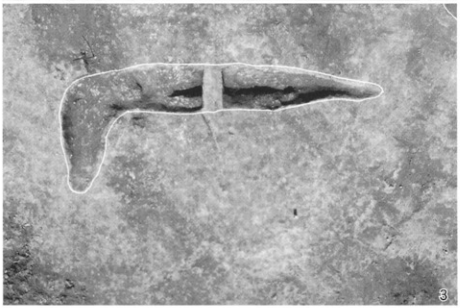
2．同　上

3．同　上
土　層

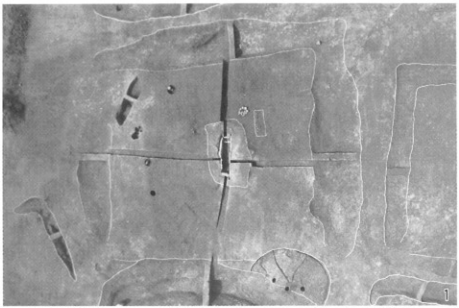
1. 2号住居跡
土器出土状況



2. 同　上
土器取り上げ後

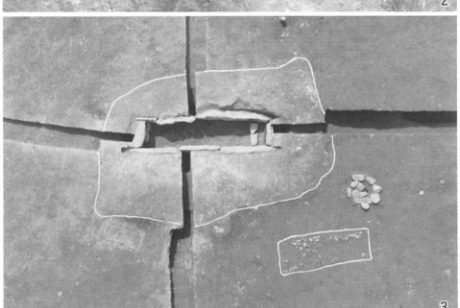


3. 段状遺構



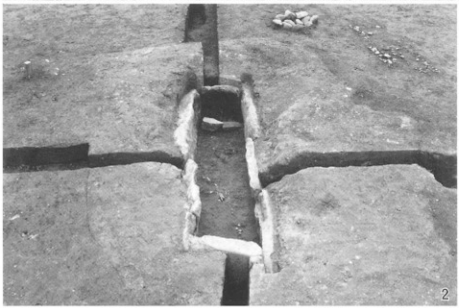
1. 1号墳

2. 同　上
周溝土層（西側）



3. 同　上
埋葬施設

1. 1号墳
第1主体蓋石



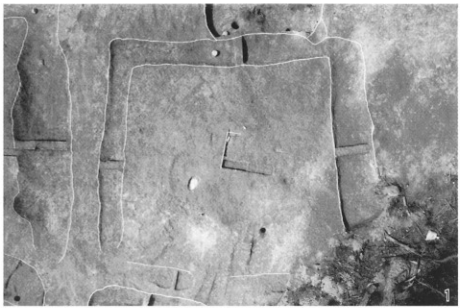
2. 同　上
第1主体

3. 同　上
枕石（西側）

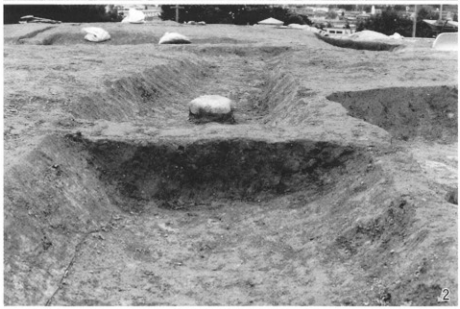
1．1号墳
第1主体（東側）

2．同　上
遺物出土状況

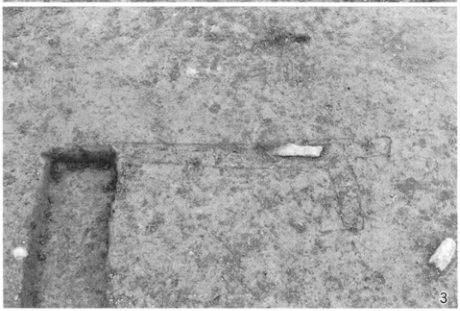
3．同　上



1．2号墳



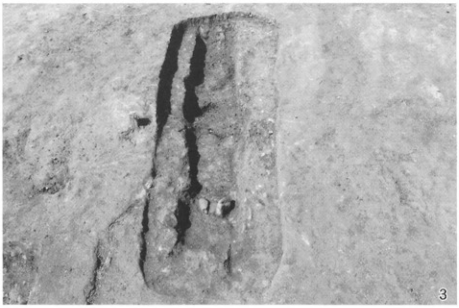
2．同　上
周溝土層（西側）



3．同　上
埋葬施設

1．3号墳

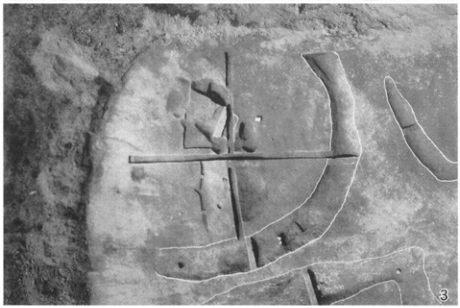
2．同　上
周溝土層（西側）



3．同　上
埋葬施設

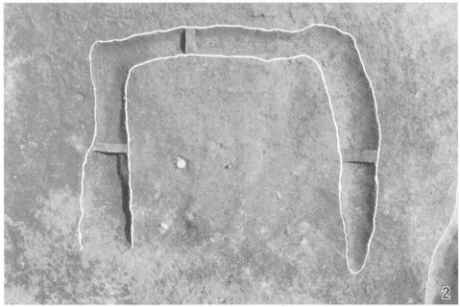
1. 3号墳
埋葬施設枕石

2. 同上周構内
土器出土状況



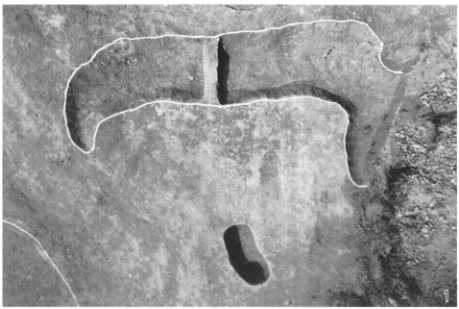
3. 4号墳

1．4号墳
周溝土層（北側）



2．5号墳

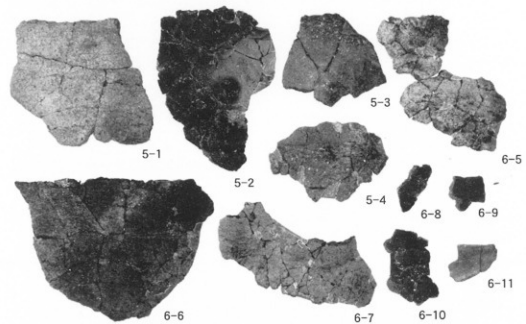
3．周溝土層（北側）

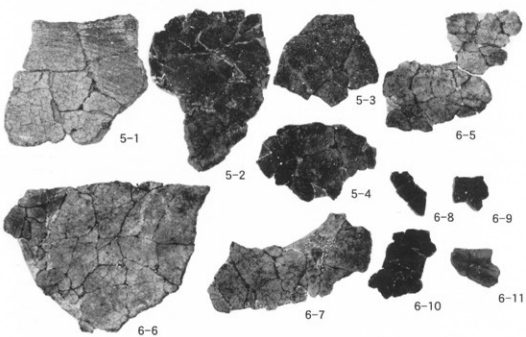


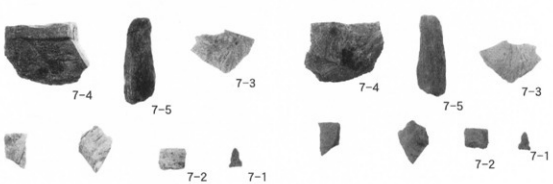
1．6号墳

2．調査風景

3．同　上


5-1
5-2
5-3
5-4
6-5
6-6
6-7
6-8
6-9
6-10
6-11


5-1
5-2
5-3
5-4
6-5
6-6
6-7
6-8
6-9
6-10
6-11


7-4
7-5
7-3
7-4
7-5
7-3
7-2
7-1
7-2
7-1

出土遺物1

12-1

10-5

12-4

8-6

12-4

21-1

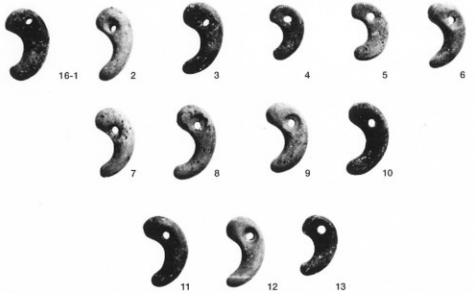
28-1

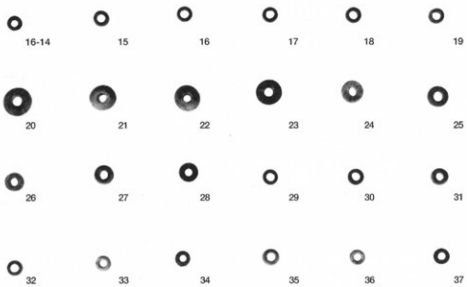
16-38

28-4

21-2

出土遺物2


16-1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13


16-14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37

出土遺物 3

報告書抄録

ふりがな	おしいれかねだいせき
書名	押入兼田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	津山市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第69集
編著者名	中山俊紀・安川豊史・行田裕美・小郷利幸・平岡正宏・川村雪絵
編集機関	津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター
所在地	〒708-0824 岡山県津山市沼600-1　TEL0868-24-8413　FAX 0868-24-8414
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
おしいれかねだいせき 押入兼田遺跡 おしいれかねだこふんぐん 押入兼田古墳群	おかやまけんつやまし 岡山県津山市 おしいれかねだ 押入字兼田 1129-1番地	33203		35° 3′ 55″	134° 3′ 38″	1999.8.10 ～1999.9.8	850㎡	ヘリポート建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
押入兼田遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代	土壙1 住居跡2	縄文土器、石器 弥生土器、砥石	
押入兼田1号墳	方墳	古墳時代	箱式石棺1 礫床？1	勾玉、小玉	
押入兼田2号墳	方墳		箱式石棺1		
押入兼田3号墳	円墳		木棺1	土器、鉄器	
押入兼田4号墳	円墳		木棺1		
押入兼田5号墳	方墳				
押入兼田6号墳	方墳		土壙？1		

押入兼田遺跡
津山市埋蔵文化財発掘調査報告第69集
２０００年３月３１日発行

発行　津山市教育委員会
　　岡山県津山市山北６６３番地
印刷　有限会社　弘文社
　　岡山県津山市川崎１６８番地